

労せずして恵みは得られない

「アリのように地表で働く人々の労働と忍耐によって、500ヘクタールの湿害地が消え、恩恵がもたらされたのだ。彼らは神に感謝こそすれ、誰をも責めない。神と自然以外の何ものにも怯えない。当てにできないものに頼らない。

背後に20年ぶりの小麦畑が広がる」

——中村 哲 (2011年3月20日の週報より)

アフガニスタンに流れる悠久の時

——小河川の灌漑工事を視察

PMS(ピース・ジャパン・メデイカルサービス)総院長／ペシャワール会会長 村上 優まさる

はじめに

二〇二四年十一月下旬より十二月にかけてアフガニスタンを訪れました。そこで見たのは、等しく貧しいものの、人々は優しさにあふれ、すべてが愛おしく思われる豊かな世界でした。

現在のPMSの灌漑かんがい事業作業地はナンガラハル州の南部、パキスタンとの国境沿いにあるスピンガル山麓です。ナージアン郡モラヘイルのごく普通の農山村に、堰せきや取水門・用水路を完成させ、十二月三日には通水を祝いました。

このあたりのアフガニスタン人の生活を見ると、山麓の平地や谷あいには家や畑が点在し、人々が鋤くわを担いでゆったり歩いています。大人たちは農業に勤しみ、穏やかに集い、お茶を飲んでいます。私たちが歩いていると、好奇の目を輝かせて子どもたちが走って寄ってくるのです。まるで「日本昔ばなし」のような光景でした。日本に伝

えられるアフガニスタンとは全く異なった、百年前とも二百年前とも変わらぬような、悠久の時間が流れる世界です。

第八次のPMS訪問

中村哲医師の現地活動が始まって四〇年、亡くなって五年の歳月が流れました。タリバン政権が復活して三年が過ぎ、二〇二二年より日本からの訪問が再開され、昨年十一月に第八次訪問チームが現地に入りました。私にとっては三回目の訪問で、マルワリード用水路のQ2・Q3池の間にある高い丘に登り、ガンベリ農場、その奥の沙漠、遠景には標高五千mクラスのスピンガル山脈がうっすらと見える処にたたずむことができました。白髪になった中村医師が穏やかな表情をして座っている写真や、映像記録『荒野に希望の灯をともし』で、ガンベリ沙漠が用水路からの水を得て、鳥の囀りさえずりや人の声が遠方より聞こえる緑の農場になって現れるシーンでなじまれている丘



スピングル山麓の村にて。好奇心旺盛な子どもたち。
(2024年12月10日)

です。今、眼前に広がる農場や森は、写真や映像で見る緑よりもさらに濃くなっていました。

アフガニスタンは岩石沙漠の地が大部分で木々はまばら、密集して緑なす日本の森のような光景はありません。ですから、この森はアフガニスタンの人々に強い印象を与えているのでしょうか、多くの人々が癒しを求めて訪れています。

中小河川での灌漑事業

今回の訪問は、スピングル山系の山麓で行われている中小河川での灌漑事業地(バラコットとナージアン郡)の視察や工事の打ち合

わせが中心でした。これらの地域は、細々と流れている川や湧き水・地下水から、ジュイーと呼ばれる小水路やカレーズ(地下水路)によって水を得ていましたが、地球温暖化のために山の積雪が少なくなり、地下水や湧き水が減少していました。

中村医師も、アフガニスタンでは大河川から灌漑する大規模農業は例外で、中小河川から水を得るのが伝統的な農業であったことを繰り返して述べています。すなわち、アフガニスタン全土で最も犠牲になっているのは、比較的低い(四千m以下)山の雪に依存してきたところ(中小河川流域)なのです。

二〇〇三年、「緑の大地計画」を公表した時に中村医師は次のように述べています。

「PMSでは北部のドラエ・ヌール渓谷で、カレーズの再生と灌漑井戸の対策を施し、約二万名の住民の生存を可能にしてきたが、将来を考えれば、これにも限界がある。唯一の対策は、(1)豊富なクナル河水系の利用、(2)春から夏に急速に流れ下る小河川の水の蓄積、これ以外に生き残る方策は考えられない」(会報75号、二〇〇三年四月)

このうち、中村医師が手をつけることができたのは大河からの取水でした。その後、も繰り返してスピングル山系麓の惨状に触れています。ISや外国軍の暗躍も絡んで混沌たる情勢が続く、手掛けられなかったのです。今、中村医師は中小河川地域での灌漑がPMSの重要な事業となっているこ

とを喜んでいるでしょう。

二〇二二年、シェイワ郡でのPMSの灌漑事業を遠くから羨望していたコット郡長老がPMSに要請して、バラコットの用水路工事が始まり、二〇二四年三月に完成しました。

モラヘイル用水路の通水式

二〇二四年四月からは、同じくスピングル山系のナージアン郡モラヘイルで工事が始まり、同年十二月三日、私たちも参加して、中村医師の魂と共に通水を祝いました。取水堰と取水門、それに続く約二キロの用水路が完成し、四万七千³m³と二千五百³m³の貯水池を見ることができました。下流域での最終の麦の種播きに間に合い、人々は安定して流れるモラヘイル用水路からの水に感動していました。

今後、ナージアン地区では、モラヘイル用水路の上流域のバゴン等の用水路やトルナウでの砂防堰堤の工事など関連事業が続きます。その調査や工事で山麓の奥に入ると、人々がどこからともなく湧くように現れてきますし、子どもたちの姿も多く見かけました。中村医師が語っていた、素朴で懐かしく、愛おしいアフガニスタンを垣間見ることができました。

ハンセン病医療再開への準備

PMS事業の継続が軌道にのった今こそ、

将来に向けての人材育成や継承の課題が重要となってきました。その話し合いの中で、中村医師の活動の原点であるハンセン病医療の再開が合意されました。ハンセン病は貧困に苦しむ山村で多く見られ、未だ医療の手が届きにくい疾病です。

中村医師の「誰もしたがらない、行きたがらないから我々が行く」という精神は、ここに原点があります。州政府からの要望もあり、東部アフガニスタンで具体化の一步が始まりました。

日本に戻ってきて

世の中は混乱の度を増し、真偽も不明な情報が飛び交っています。三〇年以上前からグローバリゼーションや新自由主義という言葉がもてはやされてきましたが、今やその終焉を見る思いです。中村医師は「カネと暴力が支配する世界」と表現していましたが、結果は凄まじいまでの富の格差と戦争状態となっています。地球温暖化による気候変化の惨状も全世界で起きています。しかも、最も甚大な被害をこうむっているのは、アフガニスタンをはじめとする、弱い立場にいる人々なのです。

この四〇年間、中村医師は、命や小さきものを慈しみ、愛おしんで手を差しのべる、その繰り返しを具体的な行動で示してきました。私たちもそれを範として、中村医師の事業を続けてまいります。

新年度に当たり、皆さまの温かいご支援に心からの感謝を申し上げますと同時に、

今後とも末永く見守ってくださいますようお願いいたします。